

# 団長の心のものさし

ハートを打つ  
ポップス  
若者の音楽性

## ポップスを歌うということ

僕が指揮をするようになってからポップスを歌う機会が増えた。意図的ではない。自然な成り行きだ。けっして聴衆のニーズに合わせているわけでもない。どちらかといえば歌いたいたからだ。

うたおには合唱団だ。一部の特殊な作品を除けば、取り上げる作品のほとんどに「歌詞」がある。詩の世界がある。音楽でメッセージを伝えることを嫌う人もいる。それはそれでいい。でも僕はそれが出来ない歌に意味はないと思っている。言葉を伝えることで初めて「歌」になる。

ポップスは稚拙だと論ずる諸氏もいる。稚拙？誰がそんな基準を作ったというのだろう！若者が作って歌う歌たちがたくさんの人の心を打っ

ている。分かりやすい言葉で気取らず、それでいてハートのある歌が人々の心を捉えている。



旅立つ日のジュレックス

よく文化レベルが違うと評する人がいるが、まったく理解できない。レベルが違うのではなく、「違う文化」なのだ。日本と外国のそれが違うのと同じである。好き嫌いの感情(基準)で否定をしてはいけない。愚かだ。すべての存在には意味がある。

必要性がある。ジャンル分けは好きではないが、クラシックの世界にもこのような大衆性を意識した作品が出てきている。ネオ・クラシックと呼ばれるものだ。

音楽は時代とともに移り変わる。とりわけ歌の世界は時代の影響を強く受けてきている。



大ヒット曲エールを歌ういきものがかり

実はそこが大衆に受ける大きな要因だ。「売れる作品」を作るのか？「いい作品」だから売れたのか？ふと考えることがある。どうでもいいことかもしれない。ただ、大衆性があるから良いという単純なものではないことは意識しておきたい。

好みによるところが大きい世界だけに、多くの情報源から「より良いもの」をチョイスする力を持ち合わせていないといけない。現代社会では、生産能力よりも識別能力が問われているように思う。

クリエイターがその良心と良識を持って作り上げたものを、パフォーマーが真摯に取り扱い、表現することで、多くの受け手に正しく、優しく伝わっていくのだと思う。



演奏機会の多い懐かしい未来のアラン

### 後ずさりしない パワーダウンしない

いつも言うように、うたおにはパフォーマーである。クリエイターとの間に、プロデューサーという役割もある。プロデューサーとパフォーマーは絶対的な信頼関係がなければ事は上手く運ばない。それが上手くいって初めて、こうしたグループは動いていくのではないだろうか。

うたおにが幾多の障害を押し退けて進んで来られた大事な、そして誇れる姿勢は「遅れる人を気にしても後ずさりはしない」ことにあると思う。常に前を向いている。けん引する力が落ちれば、必ず全体のパワーダウンに繋がる。願いや思いに裏付けられた目標に向かって動いているのがグループだ。そのためにメンバーは協力、努力しているのである。前を向けなくなった時、後ずさりした時、うたおにの心臓は止まる。

## うたおにの4月12日(月)の様子

- 練習内容  
桜の葉  
今日もひとつ  
「コタンの歌」より  
船漕ぎ歌  
マリモの歌  
熊の坐歌  
アツシの歌  
ムックリの歌  
臼搗き歌

だんだんと出席数が戻ってきたかな？なかなか手ごわい作品が多いので、ちょっと一息・・・「桜の葉」「今日もひとつ」を歌った。すぐに形に出来るのは自信を持っていい、うたおにの力であり魅力だね。  
バリトンに弓場正さんが新入団されました。新しい仲間が増えてきたね。これからのうたおにのカラーを一緒に創っていきましょう！